東京神学大学 公開夜間神学講座　　2024年8月24日
夏期研修会

主題「教会の姿を追い求めて」

小泉 健

□教会のしるし

その「しるし」を見れば、「ああ、ここに教会がある」とわかる。
そのような「しるし」とは？

＊アウグスブルク信仰告白（1530年）　第7条　教会について

また、次のように教える。唯一の聖なるキリスト教会は、つねに存在し、存続すべきである。それは、全信徒の集まりであって、その中で福音が純粋に説教され、聖礼典が福音に従って与えられる。
そして、キリスト教会の真の一致のためには、福音がそこで純粋な理解に従って一致して説教され、聖礼典が神の御言葉に従って与えられるということで十分である。……

「福音の説教」と「聖礼典の執行」　←しかし、なぜこの二つなのか？

＊ベルギー信仰告白（1561年）　第29条

真の教会を認識するためのしるしは次のとおりである。教会が純粋な福音を説教しているかどうか、キリストが制定されたとおりに聖礼典を純粋に執行しているどうか、教会の訓練が悪徳を是正するために行われているかどうか。まとめるなら、あらゆることが純粋な神の言葉によって扱われ、神の言葉に反するあらゆることが斥けられ、そしてイエス・キリストが教会の唯一のかしらと認められることである。……

イエス・キリストがおられ、働かれ、頭としてご支配くださる。そこに教会がある。
説教と聖礼典は、主イエスのご臨在とお働きがあらわになるための手段。
←わたしたちの説教と聖礼典を通して、主イエスのご臨在が証しされ、主イエスのお働きが届けられているか？　わたしたちは礼拝で、生きておられる主イエスと直面しているか？

＊マタイによる福音書18章15～20節

15 兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。…
18 はっきり言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。19 また、はっきり言っておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。20 二人または三人が私の名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。

罪と戦う。
主イエスがおられ、働かれるので、赦しを受け取ることができる。
わたしたちは礼拝で罪を赦され、互いに赦し合う赦しの共同体を形作っているのか？

□教会の姿

1）「福音のコミュニケーション」の場

社会システム／文化はコミュニケーションとして存在する。

教会＝「神との出会い（福音）は今ここで何であるか」が明らかになるコミュニケーション

神との出会いが自分の外に客観的にあると共に、主体的に身に着けられる。

今ここで「聞く」ことがなされ、その人に力をふるい、信仰が起こされる。

コミュニケーションに参与することで、受け取るだけでなく、同時に担い手にもなる。

教会においてコミュニケーションのために適した形を作る。

⇒三つの形態　①教え学ぶ

②共同で祝う

③生きることを助ける　（Chr. Grethlein）

礼拝 ┌ 主日の祝い：エクレシア（集められた群れ）　（E. Lange）
└ 週日の生活：ディアスポラ（散らされた群れ）

2）礼拝共同体

福音のコミュニケーションは教会のあらゆる営みにおいて行われるが、

その中心となるのは礼拝。

＊P. H. フェニックス『宗教教育の哲学――教育と神礼拝』（晃洋書房、1987年）

宗教の四重の現れ

	いわゆる「世俗的」「日常的」	いわゆる「聖的」「宗教的」
神の前で世俗的	1. 日常のこと （＝礼拝ではない）	4. 慣習、儀式になった宗教 （＝もはや礼拝ではない）
神の前で聖的	2. 深い意味のある日常 （＝礼拝が生じる）	3. 表面的にも真実にも宗教的 （＝いわゆる礼拝）

Liturgy＜leitourgia（ギリシア語）＝laos（民）の ergon（働き）

┌ 神の民が皆で神をほめたたえている　＝神の国での礼拝がすでに始まっている。
└ あらゆる人が共に主の食卓につく　＝神の国の祝宴の前味を味わっている。

教会では「もっと度の強い」キリスト教を（北森嘉蔵）

「3」→「4」　生きておられる主イエスとの直面を失えば、わたしたちの礼拝も堕落する。

「3」→「2」　教会での神との交わりが、日常生活に及んでいくようにしたい。

日常生活、人間関係、学問の背後に聖なる次元がある。

日常生活と教会生活が分離しないように。

例）教会の祈りが日常生活の祈りになっているか？

日常生活の嘆きや願いが神への祈りになっているか？

日常生活の祈りが教会の祈りの中に持ち込まれているか？

3）霊的養成 spiritual formation の場

＊英隆一朗「ポストモダン時代におけるスピリチュアル・ブームとキリスト教――その背景と今後の展望」森一弘他編『教会と学校での宗教教育再考――〈新しい教え〉を求めて』（オリエンス宗教研究所、2009年）

スピリチュアル・ブームからの教会へのチャレンジとしての霊的養成

①本当に神の愛を実感し、自分が救われたと実感しているか。

②イエス・キリストと本当にパーソナルにつながっていると感じられるか。

③自分の悩みを親身になって聞いてくれるキリスト者が身近にいるか。

④自分のキリスト者の召命と使命を真に自覚し、それを実践し、生きがいを見出しているか。

⑤教会のメンバーが神の国の実現に向けて、一致協力して歩んでいるか。

←霊的な渇き、求めがある。

教会共同体で、人間形成における霊的側面が正面から問われ、取り扱われ、養われる。

感性的、感覚的な求めから、主イエスとの人格的な出会いと交わりへ。

4）神の国の橋頭保、開始

＊S. ハワーワス、W. H. ウィリモン『旅する神の民――「キリスト教国アメリカ」への挑戦状』（教文館、1999年）

キリスト者は地上では旅人、寄留者。教会は神の国のコロニー。

教会の存在そのものがキリスト教倫理、キリスト教社会倫理の土台に。

一人ひとりが実例として信仰を証しできる。福音を生きるとはどういうことかを示せる。

愛と赦しによって他者を受け入れる生活を可能にする聖化へと招かれる。

他者を信頼し、平和を作り出す。

働きの成果ではなく存在が重んじられる。

←福音は生きることの全体に及び、社会を形成することへと広がる。

教会でそのことを生き始めることができる。

←教会がする政治への貢献は、「見張りの務め」ではなく、和解の福音を語り続けること。

（R. v. ヴァイツゼッカー）